第25代専如門主伝灯奉告法要
首都圏協賛行事
次世代リーダーズサミット
開催報告 3

テーマ「誰一人取り残さない」

浄土真宗本願寺派第二十五代門主に就任された専如門主は、ご親教「念仏者の生き方」において、テロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が私たちの自己中心的な心を原因としていると指摘されました。その上で、誰一人残さず救いとるという阿弥陀如来の願いをいただく私たちが、仏さまのお心にかなう生き方を目指し、一人ひとりが世界の幸せのために行動していくことの大切さをお示しくださいました。

世界規模で頻発する困難な問題の解決を目指した動きは、世界中で始まっています。国際連合加盟国は、二〇一五年九月、「誰一人取り残さない――No one will be left behind」を理念に、二〇三〇年を目標年と定め、貧困・飢餓・不平等・環境など十七の目標、「持続可能な開発目標：SDGs（Sustainable Development Goals）」を設定し、広範な課題に統合的に取り組む必要性を呼びかけました。SDGsという世界規模の目標から様々な取り組みを見返すことで、既存の活動の見直し、具体的な活動の展開、諸活動の相互連携を生み出すことが必要とされています。

十一月八日に築地本願寺で開催された第二十五代専如門主伝灯奉告法要首都圏協賛行事「次世代リーダーズサミット　仏教×SDGs」は、ご門主の「念仏者の生き方」を受け、次世代を担う人びと（次世代リーダーズ）が主体となり諸問題の解決に寄与していけるよう、SDGsから学びを深めるために企画されました。

本号では、モデレーターに東京藝術大学理事の国谷裕子氏、パネリストに慶應義塾大学大学院教授蟹江憲史氏、一般社団法人エシカル協会代表理事末吉里花氏、NPO法人おてらおやつクラブ代表理事松島靖朗氏、相愛大学教授釈徹宗氏をお迎えして行われたパネルディスカッション（後半）についてご報告いたします。

パネルディスカッション（後半）

■寺院・僧侶の可能性

（国谷） お寺は全国に七万七千余りあって、僧侶の数は三十七万人という統計を目にしたことがあります（平成二十九年度『宗教年鑑』によれば、寺院数は七七，二〇六カ寺、僧侶〈教師〉数は、三四五，九三四人）。もし仏教界がＳＤＧｓへの理解を深めて、地域での取り組みを活発化させれば、社会問題解決に向けた力強いプラットホーム（環境、構造、場所）が、生まれると考えられませんか。

（蟹江） プラットホームをつくって発展させるというのは、ＳＤＧｓで言うと十七番、「パートナーシップで目標を達成しよう」です。パートナーシップを生み出していき、そこを拠点に地域でさらにネットワークが広がっていくということです。すごく理想的なプラットホームだと思います。

（末吉） 私はよくエシカルということを、日本の仏教が大切にしてきた「もったいない」「お互いさま」「おかげさま」という意味だと説明するのですが、エシカルと言われるよりも腑に落ちるようなんです。お寺が多くの方々が集まってくるような場所になると素晴らしいと考えています。

（松島） お寺というのは、特に今日お越しくださっておられます一般の方、学生さんなんかはお持ちかもしれませんが、漠然としたイメージがあって、何かできるけど、具体的にお寺はこれだというイメージをお持ちの方は少ないのかなと思います。曖昧な存在で、そして、住職の顔も知らないけども、そこにはお寺が何となくあるという、存在の強さがあるなと思います。「おてらおやつクラブ」の活動においても、全国各地でひとり親家庭の支援をする際に、直接親御さんとお寺がつながって支援しているというのはあまりなくて、お寺のあるそれぞれの地域で、すでに支援団体さんとご家庭のつながりがあるなかで、その支援団体さんを通じて後方支援するということがお寺

国谷 裕子
（くにや ひろこ）
東京藝術大学理事、慶應義塾大学特別招聘教授。米国ブラウン大学卒。NHK衛星放送「ワールドニュース」キャスターを経て1993年から2016年までNHK「クローズアップ現代」のキャスター。著書に、『キャスターという仕事』（岩波書店、2017）。

の役割になっています。顔が見える関係と言うよりは、どこかで自分たちのことを見守ってくれるお寺があるんだ。もっと言うと、誰も漏らさず、救い取ってくれるほとけさまがいるということを、親御さんたちが実感としてお持ちくださっている。そんな関係が本当にありがたいなと思いますし、まさにお寺がそういった支援をする、機能している側面でもあるかなと思います。

（釈） 檀家制度が江戸時代に確立して、次第に崩れながらも今まで続いてきました。檀家制度は、地域コミュニティーを地盤にして、檀家・門徒というメンバーシップへの取り組みが主たる活動になります。ところが現代では、地域コミュニティーが崩壊・変質するという状態になりつつある。つまり日本のお寺は好むと好まざるとにかかわらず、変節期を迎えているわけです。さらに、東日本大震災以降に注目されたように、現代社会が宗教者や宗教施設に公共性を求めていることは明らかです。この二つの兼ね合いがあると思います。そんな状況において、ＳＤＧｓのようなプラットホームができて、それぞれの草の根的な活動が、世界や人類への道筋へとつながっているというのは、日本のお寺や僧侶にとっては新しい回路だと思います。それに七万七千のお寺が持っている可能性というのは侮れないものがあります。地域に眠っているような社会資源を引き出す能力もあると思います。

（国谷） 確かに日本社会は変わりました。地域のつながりが壊れて、そして、家族の絆が希薄になっている中で、ある意味ではお寺を支えていた基盤というのが弱くなっている中で、お寺の公共性が問われているということですが、企業も私たちも、いろいろな組織が公共性、あるいは広域性が問われる時代になったのかなと感じます。

（蟹江） 草の根で、しかもテーラーメイド（一人ひとりにあわせて）で、いろいろなところを状況に合わせて一つの考え、理念でもって対応できるというのが、宗教、仏教の強みだと思います。ネットワークということを考えると、七万七千のお寺があるネットワークというのは、すごく貴重なものだと思いますし、いろいろなかたちで、情報交換などをされているのかもしれないですけれども、

いいことをどんどん見習えるような仕組みが大事なのではないのかなと思います。

そういう側面が出てくると、内面にある公共的なものをどんどんつなぎ合わせて、それがどんどん大きな力になって、大きなうねりに変えていける可能性があるのではないかなと思います。

■若者と寺院とSDGs

（国谷） 末吉さんは、SDGsに取り組もうとしているお寺と若い方たちを結び付けるようなアイデアとか、エシカル消費（人と社会、地球環境のことを考慮して作られたモノを購入あるいは消費する）とお寺との連携のアイデアというものはありますか。

（末吉） フェアトレード・タウンという市民運動があります。フェアトレードというのは訳すと「公正な貿易」です。日常的に先進国の私たちが消費しているものの多くは途上国でつくられていて、その途上国の生産者は、安い賃金で、危ない環境で働いているというようなことが多いため、そういった途上国の生産者に適正な賃金を払いつつ、彼らが自立できるようなことを支援していく貿易の仕組みをフェアトレードといいます。このフェアトレードをできる限り応援していこうというまちぐるみの運動がフェアトレード・タウン運動です。例えば、鎌倉市の隣にある逗子では、フェアトレードのコーヒーを市民で決めて、そのコーヒーの選別や袋詰め、パッケージデザインを障がいを持った方たちが担い、市民の高齢者の方々とみんなでそのコーヒーを販売し、広めていきました。そうしたら、ものすごく人気になって、お寺の方たちも積極的にフェアトレード・タウンに関わってくださっています。

（国谷） お寺が社会問題に積極的に関わるということは、ご門徒以外の接点をたくさん持つようになり、さらには、若い方たちとお寺とのコラボをもっともっと広げられるのではないかと思えます。

（釈） そこは各寺院や僧侶がどれだけ魅力あるものを提示できるかにも関わっているでしょうし、また、一つのお寺の取り組みだと微々たるものかもしれないですが、日本の場合は宗派という大きなネットワークを持っていますからね。一人の僧侶、一つのお寺ではなかなかできないことを、宗派の力を借りてできるということもあるのではないかと思います。若い世代にとって魅力的な活動も可能かもしれません。

蟹江 憲史
（かにえ のりちか）
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授、国連大学サステイナビリティ高等研究所シニアリサーチフェロー。著書に、『持続可能な開発目標とは何か―2030年へ向けた変革のアジェンダ』（ミネルヴァ書房、2017）。

また、多くの宗派が教育機関をもっています。宗門校や宗門関係校がありますので、そちらのネットワークも使えるはずです。

（国谷） ＳＤＧｓで一番難しいこととして、一つひとつの目標を自分事として考えていくことがなかなかできない、というふうに言われています。蟹江先生、自分事にどうやっていけるのか、ヒントはありますか。

（蟹江） 一つのヒントは、ＳＤＧｓのテキスト（「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための２０３０アジェンダ」など参考）そのものの中にあると思います。目標だけ見ていると、もっともだなというところだけが見えるかもしれないですけれども、その下にあるターゲットを見ていくと、例えば、二〇三〇年までに一人当たりの食料廃棄物を半減しましょう、とあります。一人当たりということは、自分がやれば、それは一人当たりということに直結します。二〇三〇年までに一人当たりでの食料の廃棄物を半減するにはどうすればいいのか、ということを考えるヒントがあると思います。それから、やはり指標というのは独り歩きしたら困るものだと思いますけれども、何かを測るためにすごく解りやすいやり方で、解りやすく数値で出せるようなものを出したりもしています。指標の中にも何をやればよいのかというヒントはあると思います。

もうちょっといろいろ考えてみると、やはり自分だけではなくて、コミュニティーであったり、仲間を見つけてやったり、最近特に若い方たちはネットワークがよくつながっていて、すぐ人と人のつながりができています。そういったものを通じて、自分事からもう少し大きな動きなどにしていくこともできると思います。

末吉 里花

（すえよし りか）

一般社団法人エシカル協会代表理事。慶應義塾大学卒業。エシカルの啓発・促進運動を全国の自治体や学校、企業で展開。東京都消費生活対策審議会委員、NPO法人FTSN（Fair Trade Students Network）関東顧問。著書に、『はじめてのエシカル』（山川出版、2016）。

■「仏教×ＳＤＧｓ」

（国谷） 最後に、蟹江さんと末吉さん、ＳＤＧｓを推進してきた立場からは仏教界にどんなことを期待しますか。そして松島さん、釈さん、改めてどんなことをやっていきたいのか、お伺いしたいと思います。

（蟹江） 一つはＳＤＧｓに合う四字熟語をぜひ考えていただきたいと思っています。ＳＤＧｓに合う四字熟語を考えて、広めたり、お説教のときに使ったりすることで、その言葉が実は世界につながっている、というかたちで言っていただきたいというのが一つです。

もう一つ言わせていただくと、やはり、コミュニティーのベースになるということが、仏教、お寺なのかなという気がしています。今人生一〇〇年の時代とか言われて、そうすると、引退してからかなりの時間を過ごさなくてはいけない。地域のコミュニティーでのつながり、全てとは言わないですけれども、一つのつながりということで、お寺のコミュニティーという場があれば、いろいろなかたちで、社会とのつながりを保っていけるし、社会とのつながりを保つことで、豊かな老後の生活を送れるのではないかという気がしています。

（末吉） 私が一番期待しているのは、若者たちに働き掛けて、ともに何かしてほしいということです。今世界で起きていることを、学校の教育の中や地域で学ぶ機会があるといいと思います。世界の問題を知れば知るほど、罪悪感や絶望感を抱く人が出てくるかもしれませんが、その先には罪悪感を乗り越えて共感するという気持ちが芽生えてくるはずです。そのように変わっていく若者を何人も目の当たりにしてきました。共感したときに初めて、問題が自分事になっていくのではないかと思います。若者たちが、世界や自分の暮らす地域で起きていることを、まず知ることができる場、そして共感できる場をお寺として提供してもらえないかなと思います。

（松島） 「自利利他」。この四字熟語はどうでしょうか。他人の喜びが自分の喜びになる。自分自身がうけとる利益が人々にとっても利益になるという、仏教の基本となる言葉があります。自分だけがよければいいということではない。縁起の世界に生きているわれわれですから、自分の支えになっている人たち、関係ある人たちを利することも自分たちの喜びである。それがまさに仏教の実践を通じて、世の中に提示できる大切なことだと思います。

若い方たちが共感するポイントはいろいろあると思いますが、やはり、若い方たちからドアをノックしてほしいと思います。若い方たちが未来に責任を取れる当事者であるからです。責任を担ってもらう当事者であるということをしっかりと意識してもらう。そんな場をつくる必要があるのだろうと思いました。

また、お寺に関わる人たちは、ぜひ自

松島 靖朗
（まつしま せいろう）
浄土宗安養寺住職。NPO法人おてらおやつクラブ代表理事。早稲田大学卒業後、（株）NTTデータを経て僧侶に。仏様への「おそなえもの」を「おさがり」として「おすそわけ」する「おてらおやつクラブ」を通して国内の貧困問題に取り組む

信を持ってください。「おてらおやつクラブ」が、ここまで全国の活動として広まったのは、確かに全国に信仰の力が存在しているから、多くの人たちがほとけさま、ご先祖さまへのお供え、供養する気持ちが現代社会においてもしっかりとあるからこそ、活動がここまで短期間で全国に広がったのですから。

（釈） 四字熟語ですが、松本紹圭さん（一般社団法人お寺の未来代表理事）が「ＳＤＧｓの『誰ひとり取り残さない』は、摂取不捨だ」と言っていました。ＳＤＧｓという回路を活用することで、これまでの地域的な活動も大きな公共性へとつながります。これは、ある種の喜びというか、やりがいというか、お寺・僧侶のモチベーションにつながるのではないかと思います。

人間が本来もっている過剰性を暴走させてきた現代人が、これからどのような道を選んでいくのか。ことにわれわれは東日本大震災の際、いかに社会的フェアネス（公平さ）が大事かを知らされたように思います。普段はあまり気が付かないのですが、社会がピンチのときに頼りになるのは社会的フェアネスです。そして、シェア（共有する、分かちあう）という行為は、つながりを実感させてくれます。人間は、つながっているという実感があれば、苦しい日々もなんとか生きていくことができます。人間の心と身体の仕組みはそういうふうになっています。つながりの実感、他者との共感、ここが肝要です。

最初に申しましたが、このフェアとシェアについては、仏教が最初期から取り組んできたことです。考えてみたら高度成長期には、仏教はあまり活躍しなかった。やはりキリスト教プロテスタント的な感性が活躍しました。しかし、われわれの社会は成長期を終えて成熟期に入っているわけでして、成熟期社会においては仏教が説く智恵を活用していこうとする態度は大切じゃないかと思います。それに、すでに若い世代において成熟期社会への適応がいち早く始まっているとも感じています。そのあたりと仏教やお寺とがうまくかみ合えば、いい取り組みになるのではないでしょうか。

……

ご親教「念仏者の生き方」では、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が私たちの自己中心的な心を原因としていると指摘され、最後に「国の内外、あらゆる人びとに阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しく、わかりやすく伝え、そのお心にかなうよう私たち一人ひとりが行動す

ることにより、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に努めたいと思います。世界の幸せのため、実践運動の推進を通し、ともに確かな歩みを進めてまいりましょう」と示されています。

世界規模での困難な問題を解決するためにどのように考え、行動していけばいいのかを考えるために、「次世代リーダーズサミット　仏教×ＳＤＧｓ」は企画されました。以下、今回得られた学びをまとめておきたいと思います。

まず、諸問題の「つながり」です。世界規模での問題は、気候変動が貧困や飢餓を生じさせ、その結果として争いが生じているように、一つひとつが重要な問題でありながら、相互に関連し合っています。そのため諸問題の根本的な解決のためには、個別の問題に取り組みつつも、同時に包括的な視点を持つことが重要だとされます。

次に、変化ではなく「変革」が不可欠だということです。危機的な状況を打開するには、一人ひとりの行動を変え、その積み重ねによって大きな変革へとつなげる必要があります。そして、その「変革」を生み出すには、行政や企業、ＮＰＯ法人などの諸団体、宗教者・宗教団体など多様な分野に属する人びとが共に対話し、考え続けることが必要ですし、その中に一般の方々、そして「次世代リーダーズ」である若者を巻き込んでいくことが重要になってきます。

こうした点を背景にしてパネルディスカッションでは、世界規模での問題の解決のために寺院や僧侶がもつ力、例えば「フェアとシェア」、「ネットワーク」「教育」などが重要になるとして議論が交わされました。そうした際注目されたのが、「おてらおやつクラブ」の事例から紹介されたように、特別な取り組みが要求されたのではなく、日常の寺院活動が社会の問題解決に寄与しうるということでした。

マーヘル・ナセル氏（国連広報局アウトリーチ部 部長。詳細は、『宗報』２０１８年2月号参照）が述べられたように、自分に都合のよい人のためだけに行動すれば、公正性・平等性は失われ、世界の諸問題をより深刻にしてしまいます。念仏者としてこれからどう行動していくのか。ＳＤＧｓから得た学びをもとに、引き続き、皆さんと共に考えていきたいと思います。

※本文中の（　）は編集者が挿入しました。

（本願寺派総合研究所　教団総合研究室）

釈 徹宗

（しゃくて っしゅう）

浄土真宗本願寺派如来寺住職、相愛大学人文学部教授、特定非営利活動法人リライフ代表。専門は比較宗教思想・人間学。著書に、『落語に花咲く仏教　宗教と芸能は共振する』（朝日選書、2017）など。